

文藝春秋

藤原伊織

てのひらの闇



てのひらの闇 やみ

平成十一年十月三十日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 藤 原 伊 織
ふじわら いおり

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二一八〇〇八 東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表 〇三―三二六五―一二二一

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

© Iori FUJIWARA 1999 Printed in Japan
ISBN4-16-318760-X

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

てのひらの闇

装画 浅野隆広
装幀 大久保明子

頬に一滴、冷たいしずくの感触があった。ついにかすかなざわめきがとどいてきた。

この冷気のなか、さらに冷んやりしたにじみをひろげているのは、たぶん雨だ。どうやら雨粒がパラパラと音たて、路面をたたきはじめている。

その気配で、ようやく目が開いた。やはり雨が降っていた。ただ視界になんとか妙なところがある。雨が左から右へ、水平に流れている。

いま、おれの頭はまるつきり役立たずだ。まるで崩れた豆腐みたいなもんじゃないか。それならふだんと、たいして変わっちゃいない。ぼんやりした思いがそんな輪郭をとりはじめたとき、やっと気づいた。私は路上に横たわっていた。豆腐頭は歩道のくぼみにある。唇はざらざらしたアスファルトにふれていた。舌をのばせば、雑踏に踏みしめられた歩道の味がどんなものか、わかる位置だ。

冷え冷えとした湿気と路面。身体をはさむそのふたつから、骨に沁みるような冷たさが伝わってくる。震えを覚えた。だがおなじ姿勢で動けなかった。ひどい頭痛もあったからだ。こちらのほうは、酔いつぶれたいつもとまったく変わらない。

それでもやがて頭のどこかがまともな目覚めを迎えたらしい。身体を起こそうという気分になった。上半身だけがなんとか起きた。アスファルトに腰をおとしたまま、背中をガードレールによりかからせると、小さなため息がひとつもれた。

腕時計に目をやった。朝の五時まえだ。

雷鳴が遠くでとどろいた。それが合図のように雨が大粒になり、いきなり密度を増した。散漫な雨は豪雨に変化した。わずかに残る乾いた路面が黒く染まり、みるみるうちに消えていく。私が身につけたコートも同様だった。

長い脚が目のまえにあるカラオケ屋のシャッターを横切った。しゃれた身なりをした細身の黒人だった。彼は傘もささず悠然と歩き、私には目もくれなかった。つづいて女の子たちがなんらか、バッグを頭にかざし、はしゃぎながら雨のなかを駆けていった。

路上に腰をおとした姿勢で濡れながら、そのままぼんやり雨足を眺めていた。三月、早朝の雨。それがいつそう激しく降りつづいていく。やがて路面が雨水でふくれ、流れをつくりはじめた。脇に目をやると、私の頭があつたくぼみが水たまりになりつつある。あのまま目が覚めなければ、溺れていた可能性だってある。

六本木で溺死。めったにない経験だ。その貴重なチャンスを逃したのかもしれないと考えると、なぜか笑いがこみあげてきた。

ほんとうに笑ったのだろう。傘をさし、きちんとネクタイをしめた若い男がひとり、道ばたのゲロでも見るような視線で私にちらと目をやり、足早にとおりすぎていった。

顔を真上に向けた。空は暗いが、その暗さはすでに夜のものではない。開いた口に、都会のチリをたっぷりふくんだ雨粒が流れこんでくる。それほどバカにしたものではない味だった。

「なんだ。まだいたのか。こんなとこにさ」

声が、雨といっしょに車道のほうから降ってきた。

ふりかえると、声の主はバイクにまたがっていた。最初、そっちに目がいった。車体の前面をおおうフルカウルにドゥカティとロゴがある。おそらく900ccあたりだ。私もむかしはバイクに乗っていた。だがいま、このイタリア産の二輪を与えられても乗りこなせはしないだろう。

ライダーに目を移した。きゃしゃな身体なのに、大排気量の鉄のかたまりによくなじんでいる。ヘルメットに隠れた表情はわからないが、さっきの声にはうす笑いをふくんだ感じがあった。ようやくだれだか思いあたった。昨夜、バーにいた娘だ。ドレスがいまはレザージャケットとパンツに変わっている。足にはブーツ。

そのときになって、やっといきさつの一端が豆腐頭にもどってきた。いまここで道ばたのゲロになり、雨に濡れているのは、この娘に負うところがいくらかはあるかもしれない。

「こんなとこでなにやってんの」もう一度、彼女がいった。

「ちょっと休憩してんだ。きみの店はもう終わったのか」

彼女はうなずいた。

「ねえ。あんた、いったいだれなのよ」

「きのうもたしか、おなじ質問があった。そのとき答えたろう」

ヘルメットの内側に、今度は彼女の笑いがはつきりひろがった。ついでにアクセルをひねったらしい。アイドリングしていたエンジンの重い響きがいくらか音量をあげた。

「でも、あんた、パンピーじゃないじゃない」

「なんだ、それ。パンピーって」

「一般ピープル」

「いや」私は首をふった。「あいにく、おれはパンピーだ。くたびれちゃいるが、これでも一応、ごくふつうの平凡なサラリーマンだ。きょうもこれから会社にはきちんと顔をだす」

いまのところ、とりあえず事実ではある。あと半月ほどでそうではなくなるが、そこまで話す関係にはない。

「ふうん。そうかなあ」彼女は苦笑した。「そうはみえないけどね。あんた、どっかおかしいもん。ぶつちぎれてるもん。なんか、やくざの血でも流れてんじゃない？」

彼女の顔を見かえした。

「どうしてそう思う」

「においがすんの。あの子との騒ぎ、覚えてない？」

彼女の店でのことなら、断片的な記憶がいくらか残っている。たしかひとりの男が隣りにすわった。ひどく体格のいい黒人青年だった。ただ、そのさきが思いだせない。

「そうか。マイク・タイソンみたいなの、でかい青少年がいたような気もするな」

降りしきる雨の向こう、今度は笑い声が聞こえた。

「気もする、か。あの子、ほんとにマイクっていうのよ。あんた、きのう、店でどうしてたか覚えてないの」

「覚えてない。どうも、あとのほうが完全に消えてる。酒を飲むと記憶のなくなることがあるんだ」

「いつも？」

首をふった。「いつもじゃないさ。週に一回くらいかな」

「じゅうぶんにいつもじゃない。まあ、あんな底抜けバケツみたいに飲みゃ、当然かもしれないけどさ」

「しかし、勘定はきちんと払ったろう」

酔いつぶれても、すくなくともそれだけは習慣になっている。いつも周りから聞かされている。これからは、そういう話をしてくれる人間はいなくなるが、痛痒もまたなくなることになる。

「まあね」彼女がいった。「でも、それからアウトだったみたいね。パンピーがいまごろ、こんなところでグータレてんなら、ほんとタコってだけじゃない。もう、お酒はよしにしたら？」

「そうだな。タコなりに一応、努力はしてるんだけどな」

「じゃあ、努力が実るころ、またきてよ。じゃあね」

ギアを蹴った彼女に私は声をかけた。

「スリッパに気をつけろよ。店長」

「あんたも風邪ひかないようにね。お客さん」

ニヤリと笑い、彼女は片手をあげた。それから雨のなかを六本木交差点に向け、走り去っていった。

かすかな排気のいろを見送ったあと、頭痛と寒さをこらえながら、よろよろ立ちあがった。そのときになってようやく、しめていたはずのネクタイが消えていることに気づいた。どこかで捨てたのかもしれない。ポケットのカネをたしかめると、数枚あった万札はなくなっているものの、まだ何千円かは残っている。

流れていく空タクシーの一台はすぐつかまった。この不景気だ。六本木でもタクシーに苦労しないのは、この時間帯だけではないのだろう。

「五反田まで」

声をかけると、メーターを倒すまえに運転手が返事をかえした。

「お客さん、コート脱いじゃくれませんか。シートがずぶ濡れになっちゃう」

反論する気力はなかった。おとなしく彼のささやかな願いに従おうとしたとき、コツコツと小さな音が鳴った。

白い拳が雨の流れる窓ガラスをたたいていた。さっきの娘だった。ヘルメットのなかの顔が真横から私をのぞきこんでいる。また視界に妙なところがある。その理由に気づいた。彼女のバイクは私と反対の方向を向いていた。車線を逆走してきたらしい。

運転手に待ってくれと声をかけてから、サイドウィンドウをおろした。

「どうしたんだ」

「いい忘れてただけだよ。あんたが探してただれかさん、その人のこと調べといてあげようかわかるかどうか、保証はしないけど」

「いや、もういい」

「どうして？」

「そんなに深い理由があるわけじゃないんだ」

「ふうん。そうなの」彼女の声がそっけなくなった。「一応、訊いとく。あんた、なんて名前？」

「堀江。堀江雅之」

ふうん。またつぶやいて彼女は私をほんの二、三秒眺めていたが、やがてアクセル側の右手が動いた。単車は急発進した。周囲からわきあがるクラクションのなかを彼女はふたたび逆走した。そのあと大胆なUターンを決め、水しぶきをあげながらタクシーのすぐ脇をまた猛スピードで追

いこしていった。

運転手がため息まじりにつぶやいた。

「最近の若い連中は、いったいなにを考えてんだか」

「まったく」

あいづちをうち、昨夜のことを考えた。ずきずき痛む頭で成りゆきを思いかえそうとつとめてみた。どうにかいきさつの前半、そのひとつひとつがよみがえってきた。それだけでも大酒を飲んだ翌朝にしては、めずらしいことである。

昨夜、俳優座で映画のレイトショーが終わったのは、夜の十一時をすぎたころだ。客の流れが絶えたあと、私はひとり、しばらく路上に立っていた。気づいたときには飯倉方向に足が向いていた。

なぜ、そんな気分になったのかは、わからない。見も知らぬ店をのぞいてみる気になった理由がよくわからない。私がいまの勤め先に中途入社するきっかけをつくった人物。その消息を、五、六年まえ、風の噂に聞いたことがある。飯倉近くで小料理屋を開いているという話だった。そのときは、なんの感想も持たなかった。

加賀美順子。彼女と会ったのは、二十年もむかしのことだ。それもただ一度しかない。その後、顔をあわせる機会はなかった。それでももう一度、顔を見ておきたかったのかもしれない。たまに六本木にいて、退職をまえに柄にもなく感傷的な気分になっていたのかもしれない。なにをしゃべっていいのかわからなかった。それでも、あいさつくらいしておくべきだと考えたのかも、しれない。

しかし六本木での五、六年は数光年に匹敵する。店の存在も、さして期待していたわけではなかった。

予想どおり、聞いていた名の店は見あたらなかった。それで、まったくおなじ場所、雑居ビルの地下にあるバーにふらり入ってみる気になったのだった。ドアそばに、「ブルーノ」という小さな看板がかかっていた。

わりに広い店内、その奥に小さなステージがあり、ドラムスのセットが放置されている。たまにライブでも演る店なのだろう。客は外国人が半分ほどを占めていた。六本木では、まったくあふれた光景にすぎない。白人も黒人もラテン系らしい客もいる。カウンターもテーブル席もほぼ同様だった。ただ、私より年上の客はだれひとりいなかった。

カウンターにすわると、ひどく短い髪の毛をした娘がメニューを持ってやってきた。

それを見ず、試しに「冷やで日本酒」といつてみた。気分がまだ小料理屋に向かっていたせいもある。ひねくれた中年への露骨な^{ひんしゅく}響^{ひんしゅく}か沈黙を予想した。だがそれは、あっさり裏切られた。意外なことに彼女は黙ったまま、ごく自然にうなずいた。

待つあいだ、店内を眺めた。カウンター側の壁には、モニターがふたつある。ふたつとも潜水艦と競争するイルカの画像が映っていた。やがて字幕が入り、それが映画の予告だと気づいた。しばらくそれを眺めていた。音声は消えている。おかげで流れているBGMのほうに耳をかたむけることはできた。ママス&パパスの「カリフォルニア・ドリーム」。かつてよく耳にした曲だ。ふいに奇妙な思いが訪れた。この曲が流れていた時代。あれはいつのことだったろう。そうだ。たしか高校のころだ。あのころのおれはひどかった。最悪の時期だった。

娘がもどってきて、私はつかのまの回想から醒めた。彼女は目のまえに大振りのグラスをおい

た。透明な液体がなみなみと揺れている。一合近くはありそうな量で、口をつけるとたしかに日本酒である。どこかの地酒らしい。辛口で滑らかに喉を滑っていく。気がつくとも周囲でもなんらか、外国人をふくめおなじものを飲んでいた。

一杯だけで早々に退散するつもりだったが、その地酒の魅力のためだったかもしれない。いつかおなじ注文を重ねていた。

店内には相変わらず、六、七〇年代のポップスが流れつづけた。プロコル・ハルムの「青い影」。ビー・ジョーズの「マサチューセッツ」……。私にはこの時代と空間がわからなくなった。

どれくらい時間がたったのかわからない。何杯、お替わりを頼んだのかもわからない。たぶん一升を超えたあたりで酔いがまわりはじめていたのと思う。ふだんなら酒を飲む際、店の人間と会話を交わす習慣はない。なのに、カウンターの娘に声をかけていた。

「なあ、最近ハセシルカットが流行ってんのかい」

彼女はうさんくさげな表情で私を見た。私も見かえした。はじめて彼女が三十そこそこの年齢だと気づいた。それでも私とひとまわりはちがう。

怪訝な声がかえってきた。

「なによ、それ」

「きみみたいな髪形をむかしはそうだった」

「これ、ベリー・ショート。それ以外に呼び方あるの」

「なるほどな。ベリー・ショートか。わかりやすい時代になってんだ」

「お客さん。なにいつてんの」

ジン・セバグが流行らせた髪形を説明しようとして、思いとどまった。時間がかかりすぎ

る。サガンの「悲しみよ こんにちは」の映画を知っているのは、かろうじて私のような世代までだ。

そのとき、カウンターのなかに白人の女の子が恐縮したようすであらわれた。二十歳くらいの年ごろだった。ベリー・ショートの娘の表情が変わり、陰悪な調子の声を投げかけた。流暢な英語だった。私は英語は苦手だが、その口調には遅刻をとがめているふうがある。

言い訳めいた白人の子の話にナミちゃんという言葉が混じり、次にそれがテンチョウに変わった。それでもナミちゃんは険しい表情を崩さなかった。叱られていた子は反論を途中であきらめ、ふてくされたように肩をすくめた。

すると、このベリー・ショートのナミちゃんが店長という立場にあるらしい。私は彼女たちに割ってはいった。

「なあ、訊きたいことがあるんだが」

ナミちゃんがこちらを向いた。白人の子がほっとしたようすで、そばをはなれていった。

「なによ」彼女の口調にはまだ陰悪な響きが残っている。

「きみは、『加賀美』って店を知らないか」

わずらわしさにじむ目が私を見た。

「知らない」

「五、六年まえ、こことおなじ場所にあったと聞いたんだ」

「そんな大昔なら、私、別の商売やってたもの」

「なるほどね」私はうなずいた。「じゃあ、ついでに訊くが、きみは加賀美順子っていう人物は知らないかな。その店のオーナーだったらしいんだけど」

「ねえ、お客さん。なにかを訊くときってさきに自己紹介すんのが、世間の常識でしょ。あんた、だれなの」

「この店の客」

彼女は首をかしげ、はっきり聞こえる吐息をもらした。

「その人、あんたのなんなの。恋人？」

「そんなんじゃない。ただむかし、彼女は一種の有名人だった。女優でもあったんだよ。おれは彼女のファンだった」

「オヤジがアホな昔話をしたいって、そういうことなの？ そんなくだらない話に、はじめて会った女をつきあわせようってわけ？」

どうやら彼女の機嫌は、まだ回復してはいないらしい。いや、いつもこうなのかもしれない。

「客には、もうすこしいねいな言葉づかいをするのも世間の常識だと思うけどね」

ナミちゃんの眉がつりあがったので私はつけくわえた。

「けど理由はなくもないんだ。このビルは加賀美ビルっていうじゃないか。表にあったプレートは、まだけっこう新しかった。きみは店長なんだろう？ なにか知ってんじゃないかと思ってさ」

私の顔にあった彼女の視線がおちた。私には慣れた目の動きだった。その行方は、テーブルにおいた私の左手の甲にある。ひきつりのひどい火傷の痕が残るその部分は、必ず初対面の人間の注意を引きつける。だが彼女はなにもいわず、私の顔にふたたび目をもどした。ストラップのついた金ラメのワンピースを身につけた彼女の細い肩は剃きだしで、ひどくかぼそげにみえた。

彼女は黙ったまま煙草をとりだすと、金いろのライターで火を点けた。それから、そのライタ

―でコツコツとカウンターを二度たたいた。三秒後に黒人の青年がひとり、隣りの席にすわっていた。

彼はきれいな日本語で声をかけてきた。

「ねえ。ぼく思うんだけど、あんたは、こういう店で女性をくどくには齡をとりすぎているんじゃないのかな」

分厚い胸を持った大柄な男だ。立てばおそらく二メートル近くあるだろう。マイク・タイソンを思わせる体格だが、顔つきだけは、カシアス・クレイと名乗っていたところのモハメッド・アリに似たところがある。ハンサムな褐色の青年だった。ただ、ひどく幼い。たぶん十七、八といったところだろう。

「中年男がロマンチックな気分になっちゃわるいのかね」

青年はニヤリと笑いをうかべた。前歯が一本欠けていた。彼は右手をのばしてきた。それがスーッと越しに私の二の腕をつかんだ。おそろしい握力だった。静かなささやきが耳もとで聞こえた。「ねえ、あんたはロマンチックなタイプじゃないように思うんだよ。あくまでもタイプとしていうんだけどさ」

「きみのほうは、人のタイプを判断するには年齢が不足してるんじゃないかと思うんだよ。あくまでも経験でいうんだけどさ。それよか、その腕をはなせよ。あいにく男と腕を組む趣味はないんだ」

「なら、ぼくがいつしよに散歩しようっていったら、どうする？」

「断る」

彼は肩をすくめた。